

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

図書館の魅力のひとは情報を視覚的に体感できることではないかと、私は考えています。そうした視点を①ゼンテイに、インターネットとか電子書籍の情報より、本が並んでいる空間に②肩入れた、私的情報論のようなことを書いておきます。

デジタルの世界にある情報はとても膨大ですが、その情報を受け取るモニターの広さは限られています。携帯端末は言うに及ばず、パソコンでも普通なら二〇インチくらいでしょう。そのモニターを通して情報を探すときには、たいていキーワードで検索して検索結果の③イチランから関係ありそうなものを見ていきます。これはピンポイントで情報を拾い出すのは効果的ですが、物理的にどうしても全体を俯瞰するような情報の把握は難しいように思えます。

新聞の紙面を例に説明するのがわかりやすいかもしれませんが、その日という単位ですが新聞も幅広い分野を扱っている媒体です。朝、新聞紙を手にしたら一面の見出しが入って、どんなニュースがあったのかを知ることができます。自分が見たいのは昨日のプロ野球の結果だっただけです。スポーツ面を探して④めくっている間に、世界の情勢、経済の⑤ドウコウ、社会の出来事などが、⑥イシキしていなくても目にとまります。スポーツ面に至る前に読んでしまう記事もあるでしょう。スポーツ面でプロ野球の結果がわかって、その隣に相撲の結果が載っていれば⑦キョウミがなくても「大関は弱いなあ」とか感じているはず。ちょっと図書館の書架のあいだを歩き回って、本を探す感覚と似ているような気がしませんか。

一方、インターネットでプロ野球の結果を見る場合、毎日のようにチェックしているのであればブックマークにプロ野球の試合速報のページを登録していると思います。たまに知りたくなったり、リンクをたどれば、試合の結果が表示されます。ダイレクトにアクセスできるよさがありますが、それ以外の記事に目を通す機会は減るような傾向を感じます。

そして検索でヒットしなければ、どんなに役に立つ情報であっても、膨大な電子のデータから取り出せないままになってしまいます。この点、書架のように並んでいけば目につく可能性がある状態とは異なります。

現在、図書館の蔵書検索はパソコンでするのが一般的ですが、パソコンが普及する前までは紙のカードの目録を使っていました。さすがに今の時代、蔵書の有無を調べるならパソコンで検索するほうが便利ははずですが「目録カードのほうがよかった」という人がいました。「どうしてですか」と聞いたら、「この図書館にどのくらいの蔵書があるのか、すぐにわかるから」だそうです。一理あるかも、と感じました。

かりに一ページに五〇〇字で二〇〇ページの本があるとします。一冊で一〇万字、一〇〇冊だったら一千万字になります。一〇〇冊は図書館の棚二段分くらいです。「どこに本があるのかなあ」なんて書架をうろろしていたら、すぐ数億の文字が通りすぎていくのです。そんな中から必要な情報を探せるのですから、人も本も図書館も、たいしたものと思いませんか。

図書館の建物に入ると、たくさん書架に本がずらりと並んでいるのが見渡せます。そこを、歩いてめぐって、^⑧直感的に体感できる空間が図書館なのです。いつもモニターとにらめっこしている人は、^⑨たまには図書館で文字の世界に触れてみてください。モニターの向こう側にある情報の見え方が変わることもあるでしょう。そういえば、左脳は言語などの領域、右脳は直感などの領域ともいいます。言葉を考えて検索をして、書架を見ながら直感で本を探すことでバランスがとれるかもしれませんよ。

モニターに表示されたインターネットの情報で「このサイトは面白そう、どんなことが書いてあるのかな」とクリックして読むのも、図書館の書架で「この本は面白そう、どんなことが書いてあるのかな」と本を手にとってめくるのも、基本的にはかわりない情報への接し方なのかもしれません。

しかし私には、何か情報の残り方、理解の仕方が違うような気がします。個人的な考えですが、クリックする行為と、めくる行為の違いにも思えます。クリックは指先を動かすだけで情報にたどりつけます。そこから関連情報へのリンクをたどっていくのもクリック一つだし、自分が意図した情報と違って元の検索結果に戻るにもクリック一つです。棚から本を抜き出してめくる行為は、そこまで簡単ではなく、この本に出ているかなとイメージして本を引き出し、どこに書いてあるのかなとページをめくって、内容を確かめたら本を閉じて書架に戻す作業が必要になります。

⑩前者の方があきらかに便利で、後者の方が手間です。でも、あまりにパットできてしまう行為のため、ひと呼吸置いて考える時間がなくなっているのではないのでしょうか。考える時間より先に、次の情報、次の情報とクリックを続けていくのがインターネットのよさであり、せわしなさのような気がします。一週間前にどんなサイトを見ていたのか……、私の場合「ふうん」と読み飛ばしてクリックを続けていることがほとんどなので、ざんねんながらあまり記憶には残っていません。

情報があふれる時代、刻々と変化する流れに対応していかうとすれば、早くて便利にこしたことはありません。情報を知らないと損をすることが多いのも事実です。これら機器の使い勝手もさらに向上していくでしょう。しかし誰もが、次の情報、次の情報とクリックを続けている時代だからこそ、⑪ちよつと立ちどまって考えるような機会が大切なときも出てくるのではないかと感じます。

世界の各地で起こっているさまざまなおことはモニターに表示されるけれど、肝心の自分のことや身の回りのことが、わからなかったりします。情報の波に飲み込まれず、情報と向き合って自分の立ち位置を確かめたり、自分を見つめ直したりする時間も必要でしょう。それにはクリックだけでは早すぎるのかもしれない。

『図書館で調べる』高田高史

問一 ― 部①・③・⑤・⑥・⑦のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ― 部②「肩入れた」の意味として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア にげ込んだ イ のめりこんだ

ウ 背を向けた エ 味方をした

問三 部④に当てはまる最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア べたべたと イ しげしげと ウ じりじりと エ ぱらぱらと オ さざらざらと

問四 ― 部⑧「直感的に体感できる」とありますが、ほぼ同じ内容が述べられている部分を、文中から十二字でぬき出しなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問五 ― 部⑨「たまには図書館で文字の世界に触れてみてください」とありますが、なぜ筆者はそうにすすめるのですか。

五十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問六 ― 部⑩「前者の方があきらかに便利で、後者の方が手間です」とありますが、なぜですか。六十字以内で説明しなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問七 次の中から、本文の内容に**合わないもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

ア デジタルの世界にある情報はとても大きいものだが、その情報を受け取るモニターの広さは限られている。

イ 新聞の紙面には見出しが入っていて、どんなニュースがあつたのかをすぐに知ることができる。

ウ インターネットを使用すれば、いつも正しい情報にダイレクトにアクセスすることができる。

エ 現在の図書館検索はパソコンであるのが一般的だが、普及する前までは紙のカードの目録を使っていた。

オ インターネットは便利ではあるが、せわしなく見続けてしまうので、人間の記憶には残りにくい。

問八 ― 部⑪「ちよつと立ちどまつて考えるような機会が大切なときも出てくるのではないかと感じます」とありますが、筆者

はなぜそのように考えるのですか。百字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〈実の母を亡くしたあと、次々とさまざまな〈親〉たちに育てられた優子(「私」)は、今、父親代わりの「森宮さん」と暮らしている。高校最後の合唱祭の前日、家でピアノ伴奏の練習をしていた優子に、森宮さんは、練習につきあって一緒に歌うと言い出し、歌い始めた。〉

最後になるに①シタガい、歌も演奏も壮大に深まっていく。最後の三連符を弾き終わり、私が鍵盤から指を離すと、森宮さんは「おお」と感嘆の声を上げた。

「一人で歌っているときは、旅立ってばかりでえらくおおげさな歌だと思ってたけど、ピアノと合わせるといいよな」
「だね。っていうより、私、びっくりしたんだけど」

「何が？」

「何がって。森宮さん歌、すごく上手。②しかも、こんなに歌いこなせるなんて。それに、どうしてこの歌知ってるの？」
私が疑問に思ったことを並べると、森宮さんは「いやあ」と照れくさそうに笑った。

「森宮さんも合唱で、ひとつの朝歌ったことあるの？」

「そうじゃないけど」

「だったら、どうして？ この歌、聴くことなんてあんまりないと思うけど？」

「その、まあネットで曲を調べて、練習したんだ」

森宮さんはまずいことでも見つけたかのように肩をすくめた。

「へえ……って、どうして？ どうして練習を？」

森宮さんは歌詞を見ていなかった。それに、曲調が何度も変わるこの歌を、完全に歌いこなしていた。歌がうまいだけでは歌えない曲だ。

「なんていうか、父親なら娘が合唱祭で歌う曲くらい歌えて当然だろう？」

森宮さんはえへと笑った。

「まさか。そんな父親いないと思うけど」

「やっぱり、^③そうだったか。練習しながらうすうす感づいてはいたけど。……でもこの曲歌つてると、必要以上にやる気が出たよ。通勤電車の中で、広がる自由を求めてつてうっかり口ずさんでしまった時は、みんなに白い目で見られたけどな」
「だろうね」

「まあ、やっぱ俺^{おれ}つてどこかずれてるんだよな」

どこかどころか、すぐくずれている。だけど、森宮さんが歌う「ひとつの朝」はとても良かった。

「そうだ、本当は合唱祭が終わってから弾こうと思ってたんだけど、森宮さんが高校の合唱祭で歌った曲、歌おうよ」

私は机の引き出しから楽譜を取りだして、譜^ふ面^{めん}台に立てた。

「え？」

「森宮さんが高校三年生で歌った歌だよ」

私はそう言うと、前奏^{ぜんそう}を奏^{かな}でた。

ゆつたりとした情感があふれるメロディ。「ひとつの朝」の壮大さとは違^{ちが}う、どこか懐^{なつ}かしい響^{なづ}きの曲。

森宮さんは前奏の間、「いったい何？」^④「え？ うそだろう。なんで知ってるの？」と言っていたものの、メロディが始まるとぼそぼそと歌詞をたどるように歌い始めた。

なぜめぐり逢^あうのかを 私たちは なにも知らない いつめぐり逢^あうのかを 私たちは いつも知らない

どこにいたの 生きてきたの 遠い空の下 ふたつの物語

森宮さんが高校三年生で歌ったのは、中島みゆきの「糸」だった。楽譜は楽器店ですぐに手に入った。耳にしたことがある優しい旋律。何度か弾くだけで、指先がメロディを覚えてくれた。

縦の糸はあなた 横の糸は私 織りなす布は いつか誰かの 傷をかばうかもしれない

縦の糸はあなた 横の糸は私 逢うべき糸に 出逢えることを 人は仕合わせと呼びます

ただたどしく歌詞を追っていた森宮さんも、すぐにはつきりと歌いだした。耳だけじゃなく、皮膚からも浸透していくような優しい深い歌声。「糸」は結婚式でよく歌われる歌だと楽譜に書いてあった。でも、会うべき人に出会えるのが幸せなのは、夫婦や恋人だけじゃない。この曲を聴くと、それがよくわかる。

「父親が合唱祭で歌った曲の伴奏を練習する娘なんて、いないだろう」

歌い終わると、森宮さんはそう笑った。

そして、私が森宮さんの母校に連絡して、結婚式で歌いたいからとうその理由を言って曲名を知ったと聞くと、「優子ちゃんって、行動力あるんだ」と驚き、

「二十年前高校三年生で、今結婚しようとしてる娘の父親って……。娘も俺もいくらなんでも結婚早すぎない？俺とんでもないヤンキーと思われてないだろうか」

と慌てふためいた。

「大丈夫だよ。二十年前ならもう森宮さんのこと知ってる先生は残ってないだろうし、電話に出てくれた先生も深いこと考えずにささっと教えてくれたから」

「本当？」

「本当だって。でも森宮さん、合唱きょわ嫌いとか言いつつ、ちゃんと歌ってたんだね。すごくうまくて驚きだよ」

私が正直にほめると、森宮さんはうれしそうに笑った。

「まあな。俺、中島みゆき好きだもん。^⑤なんか歌いたくなってきた。優子ちゃん、他に中島みゆきの曲、何が弾けるの？」

思い出した。音楽の教科書に「時代」が載のっていた。

「そうだ、時代なら弾けるはず」

「よし。それ行こう」

私が音楽の教科書を開くと、森宮さんは「あーあーあー」と発声練習を始めた。大いに歌う気だ。

「^⑥私、明日合唱祭なんだけどな。ひとつの朝、練習しなくて大丈夫かなあ。だけど、森宮さんはりきってるし」

私が大きな声でつぶやいてみると、森宮さんも、

「俺、明日朝一番で会議なんだけどな。資料目を通しておかなくて大丈夫かなあ。でも、優子ちゃんの練習に付き合わないとな」とこぼした。そして、

「さ、歌おう。こういうときは歌っておけばいいんだって。歌ってそういうものだ」

と言っただけだ。

合唱なんて好きじゃないって言っていたくせにと、私はふき出してしまった。けれど、私もまだまだピアノを弾きたかった。ヘッドホンをつけて練習するんじゃないかと、こんなふうになにかの歌と一緒に。

「そうかもね。じゃあ、弾くよ」

「よし、来い」

「ちょっと、歌うのに変なかけ声やめてよ」

それから私たちは聞き覚えのある曲をお互たがひに言い合っては、何度も歌った。ピアノを弾くのは、いつだって楽しい。合唱祭を前にして、^⑦私の中の不安はなりをひそめて、ただ胸が高鳴っていた。

「緊張するね」

「あー声出るかな」

一組の合唱が終わり、私たち二組は互いに声をかけ合いながら舞台へと向かった。最後の合唱祭に、みんな気合が入っているのだ。

「次は二組の合唱です。曲目は……」

司会者の声が聞こえ、みんなが歌の姿勢をとる。私はそっと鍵盤を見つめた。今日弾くのは体育館のピアノ。大きなグランドピアノは年季が入ってフウカクがある。

一緒に暮らしはじめてすぐのころ、私がピアノを弾いていたと知った森宮さんが、電子ピアノのパンフレットをどっさり持ってきた。

「父親とミトめてほしいっていうのは、年齢的にも俺の性格的にも少し無理があるだろうけど、でもやっぱり優子ちゃんに気に入らりたいし」

素直にそう言つてのける森宮さんに、気が抜けたっけ。

一緒に暮らすんだ。恋人じゃなく、友達じゃなく、家族という名のもとに。気に入られようとして何が悪いのだろう。気をつかって、どこがおかしいのだろう。あの時、森宮さんの言葉に私もどこかで開き直れた気がする。

注 泉ヶ原さんが⑩ネインイリに手入れを施してくれたピアノ。森宮さんがあれこれ選んで買ってくれた電子ピアノ。私はいつも最高の状態のピアノを弾いてきた。どんなピアノを前にしたっておじけづくことはない。

さあ、合唱が始まる。⑪私は指にふつと息を吹きかけた。

『そしてバトンは渡された』瀬尾まいこ

注 泉ヶ原さん・・・以前、優子の父親代わりであった人物。

問一 — 部①・⑧・⑨・⑩のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 部② 「しかも、こんなに歌いこなせるなんて。それに、どうしてこの歌知ってるの？」とありますが、「森宮さん」はこの歌を歌いこなすためにどのようなことをしたのですか。三十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問三 — 部③ 「そうだったか」とありますが、「そう」とはどのようなことを指していますか。文中の言葉を使って書きなさい。

問四 — 部④ 「え？ うそだろう。なんで知ってるの？」とありますが、「優子」はなぜ「森宮さん」が高校の合唱祭で歌った

曲を知っていたのですか。理由に当たる部分の最初と最後の六字を文中からぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問五 — 部⑤ 「なんか歌いたくなってきた」とありますが、ここからうかがえる「森宮さん」の気持ちについて、最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 歌がうまいと優子にほめられてうれしく、自分の本当の実力を優子にもっと示すためにまだまだ歌いたい気持ち。
- イ すっかり忘れていた合唱祭の曲を思い出して、他にもなつかしい高校時代の曲をもう少し歌いたい気持ち。
- ウ 高校時代は中島みゆきの曲が気に入っていたので、「ひとつの朝」よりも好きな歌のほうを楽しく歌いたい気持ち。
- エ 優子自分が自分に歌える歌をさがしてくれたことがうれしく、優子の伴奏で歌うことをもう少し続けたいと思う気持ち。
- オ 合唱が嫌いなふりをしていたが、本当は歌うことに自信があり、ピアノの上手な優子の伴奏で歌いたい気持ち。

問六 ——部⑥「『私、明日合唱祭なんだけどな。ひとつの朝、練習しなくて大丈夫かなあ。だけど、森宮さんはりきってるし』

私が大きな声でつぶやいてみると、森宮さんも、『俺、明日朝一番で会議なんだけどな。資料目を通しておかなくて大丈夫かなあ。でも、優子ちゃんの練習に付き合わないとな』とこぼした』とありますが、この会話をしているときの二人の気持ちとして最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分はやらなければならないことがあっていそがしいので、時間をもてあましていそうな相手につきあうのはめんどろから、早く自分のための時間がほしいと思う気持ち。

イ 自分はやらなければならないことがあっていそがしいので、相手に合わせるのは気乗りがしないと口では言っているが、本当は、ピアノと歌を合わせることを心から楽しいと思う気持ち。

ウ 時間をもてあましていそうな相手とはちがって、やるべきことがたくさんあるので早く終わらせたいが、相手に気をつかって言い出しにくいので、もうどうにでもなれというような気持ち。

エ 時間をもてあましていそうな相手とはちがって、自分にはやるべきことがたくさんあるが、別にそれを急いでやる必要もなく、できることならその練習や仕事のことを忘れていたい気持ち。

オ ふたりとも練習や仕事の準備でいそがしく、できることならむだな時間をつかいたくはないが、せっかく久しぶりに一緒に歌えるのだから、それぞれの事情を主張するようなことはしたくないと思う気持ち。

問七 ——部⑦「私の中の不安はなりをひそめて、ただ胸が高鳴っていた』とありますが、どうしてこのような気持ちになったのですか。何が「不安」なのかを明らかにして説明しなさい。

問八 ——部⑧「私は指先にふっと息を吹きかけた』とありますが、このときの優子の気持ちとして最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一組の人たちが上手だったので、それに負けないように自分もしっかり弾かなければと決意を新たにし、気合いを入れて自分を勇気づける気持ち。

イ 二組の他の人たちと同じように自分も緊張しているし、しつかり弾ける自信がないので、なんとか無事に終わりますように、といのりたい気持ち。

ウ 高校最後の合唱祭という緊張のなか、普段弾くことのない立派なグランドピアノを弾くけれど、多くの人に支えられてきた自分を思うと、なにも不安はないのだという気持ち。

エ 普段は電子ピアノしか弾いていないので、立派なグランドピアノを見てにげ出したいような気持ちになっているが、練習をしてきた自分のことを信じるしかないと思う気持ち。

オ いよいよ曲が始まるという緊張のなか、指がちやんと動くか不安はあるが、一緒に練習してきた二組の人たちがしつかり歌ってくれることを信じようという気持ち。